

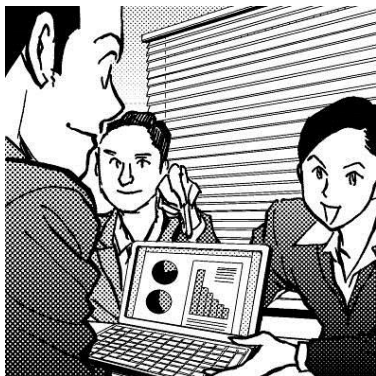
Y社では毎月、社員勉強会を開催しています。ある日の勉強会で、社員に「両親の足を洗う」という課題が出ました。

人生の中で、両親の足を洗う機会はなかなかありません。抵抗を持つ社員、どう切り出せばよいのか、戸惑う社員も少なくなかったそうです。社員の体験談をまとめた冊子の中から、感想の一部を紹介しましょう。

「今日、会社で足を洗う課題が出たのー」と私が言うと、まず母は、「えー！何それ？」という表情。父はその状況をイメジしておかしくなったのか大笑いでした。その日はとりあえず足を洗うという事を伝えて終わりました。(後日)夕飯を食べる前に「食べ終わったら洗うからね」と伝えました。いざ洗うとなるとやはり恥ずかしくなっていました。

「母親、母の照れ隠しなのか、ちよつと拗ねたような口調で「足を洗ってくれるよりも普段から素直になってくれれば良いのに」とちよつと嫌味を言われながら始めました。そのうち母の職場の話や私が小さかった頃の話、姉の話など、思っていた以上に話が盛り上がりました。「立ち仕事してるからすぐ気持ちいい」など嬉しい言葉をかけてくれました。「呆けたりしなきゃ」という事はやってももらえないよね、普通は」と。

「父親、足を洗い始めると眠りについてしまったので、感想を聞く事ができませんでしたが、父の足は思っていたよりも大きく、ずっしりと重かったです。体が固そうな足だと知ることができ



感謝を行動に移して 恩の意識を深める

ました。次の日に感想を聞くと、「洗ってもらって足が軽くなったみたいだ」と喜んでくれました。感想、母の足を見て、私とそっくりだとびっくりしました。遺伝だなと感じました。

母はここぞとばかりに、足よりも肩と腰が凝っているのよと言い始めました。普段なら私は素直に話を聞かず「嫌だよ」と言ってしまうのですが、せっかくのいい雰囲気壊したくなかったので「今日はなんでもやりましょうー」と言い、マッサージをしました。

「お婆ちゃん足を洗ってあげたら絶対喜ぶよ」と母に言われ、(母と祖母は)いつも喧嘩ばかりしますが、やはり心配なんだと感じることができて嬉しかったです。このような課題をいただかなければやる事なかった、両親の足を洗うという事毎日一緒にいる両親に感謝し、もっともつと大切にしようと思うことが出来ました。

* Mさん(女性 23歳)の感想より抜粋

この他にも、「やってよかった」という声が、社員から多く寄せられたそうです。

倫理運動の創始者・丸山敏雄は、恩について、「恩はもともと無いものを外から張りつけたものではない。中にあるものを溶かすのであるから、自覚により、教育によって、限りもなく深まり高まるものである」と述べています。Y社の「両親の足を洗う」という実践は、宿題という形で躊躇する背中を押すとともに、心の内にある感謝を高め、またとない「教育」だったと言えるでしょう。